

FPG ビジネス
コンサルティングの

釣り道

ちょっと
つりみち

[一枚の写真編]
Vol.9



ここにある一枚の写真。

これは三十年以上前に、デジカメラやスマホではなく、当時よく使われていた「写ルンです」で撮られたものです。この一枚の写真からは、いろいろなことが想い起こされます。

釣り道二回目の連載でご紹介した杖立川。この写真は確か2月頃の記憶がありますが、山間の県境に位置する杖立は溪流の冷気もありとにかく寒い。そんな寒さにも当然ヒートテックや発熱素材はまだなく、皮ジャンに毛糸のセーターで頑張っていました。

当時釣りは初心者域を出ず、とにかく試行錯誤を重ねていて、道具も選択肢はほぼ無く、リールこそ北欧製でしたが、竿と釣り糸は店頭ワゴンにあるものを適当に買い、愛着を持って大切に使っていました。そんな旧式で安物の道具でも、今と同じ深いあおみどり色の流れの中から魚がアタックした衝撃をわずかながらも伝えてくれました。

それから革ジャンはオイルドコットのジャケットになり、今はダウンやゴアテックスのフィールドジャケット

ト。ウールのセーターはフリースに、釣具もほとんどがハイテク技術で開発された最新の素材で作られています。

写っているウグイは去年の春先にご紹介した魚ですが、冬を越えた魚体には「サビ」と呼ばれる黒ずみが残っています。魚はずっと変わりますが、最新の道具で挑んでも釣果はあまり変わらないという(笑)。

ここ杖立の温泉街も、この間に集中豪雨や震災など甚大な自然災害に何度も見舞われました。それでもその都度、地元の方々は見事に復興を果たして来られました。この魚が棲む湖も何度も濁流が襲い、また夏の渇水期には水位は下がり焼け付く日照りにさらされます。それでも、この魚達はずっとここで命を繋いでくれました。

写真の青年は成人したくらい、左側の女性は、お世話になった温泉宿の旅館の従業員さんです。その時は、こんな魚がいることや釣り方などともわからずただ直感で想像だけで釣りに臨みましたが、初めて伝わった微かな魚信の感覚は

未だ掌に残っていて、釣り上げた時、背後の旅館の窓から歓声が上がった時の嬉しさは今も心に鮮明に残っています。

でも今は、川から煙く温泉街の佇まいを見ると朽ちた建物も目に入ります。それでも悠久の時と河の流れがたゆとう中で、なにも変わることなく自然はそのまま存在し続けます。

人の営みは生々流転。それを痛切に感じます。あの頃の体力や気力はもう持ち合わせてないかもしれませんが、それでも私はただ竿を振り、手元にくる魚信を感じたい。そう心から願います。

……一枚の写真から、ちょっと語りすぎたかもしれませんが(笑)。



現在の杖立温泉